



Title	日本語日本文化教育センター教育研修会 第1回発表要 旨
Author(s)	
Citation	大阪外国語大学日本語日本文化教育センター授業研 究. 2006, 4, p. 59-64
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8676
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本語日本文化教育センター教育研修会 第1回発表要旨

日本語日本文化教育センター教育研修会

日時 2005年9月17日(土) 10:40~12:30

場所 大阪外国語大学日本語日本文化教育センター棟1階 多目的ホール

内容

1. 教育事例報告・教育研究発表 司会 山川 太(学部留学生日本語科目コーディネーター)

(I) 学部留学生プログラム日本語科目の授業実践

島 千尋「日本語未習者への文法・漢字指導の一案」

阿部秀夫「既習クラスにおける中級漢字・文法・読解で思うこと」

(II) 授業研究発表

司会 平尾得子(選択日本語科目コーディネーター)

林 晃子「統計処理実習 ～アンケート調査の手順と方法～」

2. C J L C教育に関する説明

(I) 国際課総務部門「C J L C教育における情報保護と情報公開について」

要旨

(I) 学部留学生プログラム日本語科目の授業実践

山川 太

「(I) 学部留学生プログラム日本語科目の授業実践」においては、学部留学生プログラム日本語科目ご担当の島千尋講師、阿部秀夫講師に日々の授業での問題点やそれに対してどのような工夫をなされているかなどについてお話を頂いた。本報告では、各講師の発表内容について言及させて頂く前に、まず、当該プログラムの日本語科目に関して概略を記しておく。

本センターにおける学部留学生プログラム(通常“Uプログラム”と称されている)は、1年後各国立大学へ進学予定の学生たちに対して、日本語はもちろんのこと、日本史や政治経済、物理や数学などといった専門科目についても、まさに集中的に教育を施していくプログラムである。当該プログラムで学ぶ学生は、日本語学習経験の有無やその他の情報を得るためのプレースメントアンケートおよび日本語能力を判定するプレースメント試験の結果、二つのレベルに大別される。渡日以前に日本語をある程度学習している者(400時間以上の学習歴を持つ者。具体的には、初級・中級レベル教材の語彙・文型を使いこなせ、日本の初等教育で学ぶ約1,000字の漢字を既に学んでいる者)はUAレベル、日本語学習経験を僅かではあるが有する者・全くの未習者はUEレベルに振り分けられる(2005年度は、UAレベルの学生は9名、UEレベルの

学生は63名である)。

研修会当日ご発表頂いた島講師・阿部講師は、お二方ともにUEレベルご担当で、島講師が未習クラス(上述「全くの未習者」対象)、阿部講師は既習クラス(上述「日本語学習経験を僅かではあるが有する者」対象)で教えておられる。なお、UEレベルは、全8クラス(UE1～UE8)ともに日本語科目については理科系・文科系双方の学生と一緒に学ぶ文理混合クラスとなっている。

UEレベルの8クラスでは、週5日間午前中の2コマが日本語科目(SPと称される)に充てられ、その中でいわゆる「文法」と「漢字」を教授していくことになっており、各曜日の講師によるリレー形式で進められる。つまり、各クラスの学生は一週間に5名の講師からSPの授業を受けることになる。試験は、公的な定期試験である「9月試験」「12月試験」「3月試験」のほか、今年度は定着度確認の意味も込めて「6月試験」を「文法」と「漢字」について実施した。なお、4月当初はSPが全て「文法」「漢字」の教授に費やされるが、6月試験終了後(2005年度を例にとると、未習クラスでは既習文型数約130・漢字約355字レベル、既習クラスでは既習文型数約175・漢字約520字レベルとなっている)くらいから「読解」や「作文」といった科目内容もSP時間内で導入されることになっており、また、1月以降からは大学進学後に必要な学習技能を強く意識した、より実践的な「移行期カリキュラム」に文字通り移行していくことになる。授業の具体的な進め方については、4月授業開始時に各講師の方々に大まかなガイドライン的なものを配布しているが、いずれのクラスにおいても各曜日の講師間でうまく連携をとって頂き、所定の使用テキストのほかに補助教材等を用いたりするなど、それぞれ効果的な授業運営を工夫されている。UEレベルでの、「文法」「漢字」についての1年間の到達目標は、言うまでもなく“大学学部入学に耐えうるレベル”であるが、移行期カリキュラムまでの期間に絞って具体的に言うと、以下の使用テキストを用い、『初級日本語』『中級日本語』の内容を1月までに(移行期カリキュラムまでに)消化し、修得しておくことである。例年、未習クラスでは『初級日本語』を全てこなすのに最低9月中頃までかかるが、既習クラスでは6月試験終了後間もなく『中級日本語』の内容に入っていくことが可能となっている。

使用テキスト

(4月～9月)

- ・『初級日本語』(東京外国語大学留学生日本語教育センター編著、凡人社)
- ・『初級日本語漢字練習帳Ⅰ』(同上)
- ・『漢字練習シート』(『初級日本語』に準拠した形式で本センターにおいて作成した簡易教材)

(9月～12月)

- ・『中級日本語』(東京外国語大学留学生日本語教育センター編著、凡人社)
- ・『中級日本語漢字練習帳Ⅰ』(同上)
- ・『中級日本語語彙・文型例文集』(同上)
- ・『漢字練習シート』(『中級日本語』に準拠した形式で本センターにおいて作成した簡易教材)

評価については、出席状況はもちろん、定期試験および授業内に実施される小テストなど、全てを勘案し、総合的に下されることになっている。

以上、ごく簡単に本センターでの学部留学生プログラム日本語科目(特にUEレベルの「文法」「漢字」)について概要を述べてきた。

さて、研修会当日にご発表頂いた島講師・阿部講師は、UEレベルのクラスをここ数年担当されており、過去のご経験等も踏まえて、色々なお話をうかがうことができた。発表内容の詳細については、各講師に作成頂いた発表要旨をご覧くださいこととして、以下では、司会者の立場からの簡単な総括を行ってみたい。

まず、島講師は、「日本語未習者への文法・漢字指導の一案」というタイトルで、日本語未習者の学習上の問題点などを提示した上で、どのようにすれば効率のよい、かつ効果的な教授が可能になるかについてご自身のお考え・工夫を披露された。また、既存のテキスト・教材などが持つ問題点や難点なども指摘され、教材の使用についても教師側の創意工夫がないと効果が半減する旨述べられた。本センターの学部留学生プログラムでの日本語科目では、複数のテキストが用いられているが、これらの実際の使用については各講師の方々の裁量に負う部分が多い。換言すれば、学習者の定着度やクラスの進度に照らし合わせて適宜工夫を凝らした使用方法を探っていたに違いない。今回の島講師の発表は、この点について一つの指針・ヒントを与えてくれる貴重な実践報告であったと思量される。

阿部講師は、現在、既習クラス（本センターで学び始めた時点で、若干の日本語学習経験を持っている学生が所属するクラス）をご担当であり、その日頃の授業実践について「既習クラスにおける中級漢字・文法・読解で思うこと」というタイトルでお話し下さった。“漢字の書く練習は全て自宅学習にしている”など、既習クラスならではの指導方法がいくつも披露された。未習クラスご担当の講師の方々にとっても、学習者のレベルの向上に応じて取り入れられる点も多かったのではないかとと思われる。

両先生のご発表ともに広い内容をカバーしたものであったが、当初設定していた時間が短かったために、ご準備して下さった内容を十分に語っていただくことができなかったことは残念であった。しかし、発表後の質疑応答の時間には、フロアにご出席の多くの講師の方々から質問や意見という形で種々の反応があり、また、研修会全体の終了後、「非常に参考になった」「参加してよかった」などの多くの肯定的なご意見を頂けたことは、司会者として大変うれしく感じている。そして、これを機会に講師の先生方間の情報・意見交換が更に活発になされるようになり、ひいては本センターの教育の質の向上につながっていけば、と強く願っている次第である。

最後に、当日、貴重なお話をいただいた両先生にこの場を借りて心より御礼申し上げる次第である。本当にありがとうございました。

今回の研修会において、筆者は標記タイトルのもと、UEクラスの中でも日本語未習クラスに対する初級文法および初級漢字の指導について、日頃の授業方法の紹介を行った。

UEクラスでは、各課の進め方の大枠は、センターからの指示により各講師共通で行っている。初級の場合、(1)「新しい言葉」→(2)「新しい漢字」→(3)「文型」→(4)「本文・質問」となっており、それぞれにおいて筆者が行っている授業方法は以下の通りである。

(1)「新しい言葉」：一語ずつ意味確認と学生全員でのコーラス

- 面倒ではあるが、完全に予習任せにしてしまうと、「文型」の練習に入って口頭で使用したときに、言葉の意味がわからなくて授業がストップすることもある。一度でも耳と口で確認しておいた方が、あとの授業がスムーズであるように思う。

(2)「新しい漢字」：①センター作成の『漢字シート』で読みと書き練習→②手製の漢字(語彙)カードを使い全員で読み確認→③手製の漢字(語彙)シートを配付して読みと書き確認

- ①では、読みの場合、漢字を字単位ではなくその課に出てくる語彙単位で扱っている。語彙と切り離れた漢字指導は意味がないからで、したがって「この漢字の音読みは～で、訓読みは～で…」といった指導は避けた方がよいと考える。書きは、慣れるまでは黒板で筆順を示しつつ、『漢字シート』に書き込ませ、字形等をチェックして回っている。とんでもない形の字、印刷字そのままの字、中国字(簡体字)などを発見することができる。

(3)「文型」：①絵などを使ってその文型の意味と使い方を“導入”→②口頭で“形の練習”→③絵を使ったり学生自身のことを聞いたりして“意味の練習”→④テキスト例文読み

- ①の絵はオリジナル。ここで英語で意味を説明してしまうと、学生の日本語力の伸びを阻害する。②では、これまでここで『れんしゅう』というテキストを使うことになっていたかと思うが、筆者はセンターで教え始めて以来10年間、一度もこのテキストを授業中に開かせたことはない。その理由としては、(1)載っている練習が代入練習のみ。(2)キューがすべて文字で書かれてしまっているので、学生はそれを読んでいるだけになり、口頭練習の意味をなさない。(3)絵のキューもすべて字と一緒に書かれているので結局は同じこと。(4)キューが非常につまらなく、学生のやる気を失わせる。といったことがある。したがって、このテキストは教師だけが持つておけばよく、使うにしても、a. キューを変えたり追加したりする b. 練習の内容自体を変える などの工夫が必要であるように思う。

(4)「本文・質問」：①テキストを開かせず、テープを使って本文を聴解として扱い、聞き取り→②同時進行で、口頭により本文の内容質問→③テキストを開かせて本文読み

- ここでは、聴解として本文のテープを聞かせ、内容質問を口頭で行っている(全体を3～4分割)。質問は、テキストに載っている以外に、内容上質問できそうなところはすべて質問を考えて尋ねているため、最終的に、テキスト掲載の2～3倍の質問をしている。

当日の発表では、その他、復習や聴解のやり方・進度などを統括する非常勤講師のリーダーを各クラスに設置すること、また会話の授業をもっと拡充することについての提案も行った。

授業を行うに当たり、当該教育機関・学生の目指すところや学習者の学習環境・学習能力などを考慮する必要がある。今回の発表の対象である大阪外国語大学日本語日本文化教育センターのUE1の学習者は、①国費留学生であり、学費・生活費の心配が不要、②外大敷地内に住んでおり、放課後、すぐ自宅学習ができる、③国費留学生に選ばれただけの母国での学習能力を持つ（と推測できる）、④絶対的な目的（＝進学）がある、⑤日本語を少しは母国で学習してきた、という条件をもっている。

他の機関の日本語学習者と比べてみよう。同じ目的であるが、私費留学者を主な対象とした民間日本語学校では、①放課後、生活費・学費を稼ぐために、夜遅くまで仕事をしている者が多い、②したがって、自宅学習不足や授業中に疲労感を持つ学生が多い、③母国での学習成績に問題のある学生もいる、といえよう。目的は異なるが、経済的負担や学習能力がUE1学習者と似ているのは、国際交流基金関西国際センターの研究者・司書・大学院生のコースであろう。実際、UE1に限らず、筆者が過去に経験した既習者クラスや国際交流基金の学習者は、自分で学習する姿勢をもっており、数多くの課題をこなし、与えられた課題に限らず、自習用として与えたプリントも自主的にこなす学習習慣を持っている。

このような学習者に対しては、教師は、こと細かく指導するよりも、できるところは「自立的・自律的」な学習を要求し、学習内容や学習者の状況を把握しながら、学習側面支援者という形を採るほうが良いだろう、「にっこり笑って、突き放す。でも、どこかでみておく」と。もちろん、中級段階から急にではなく、初級段階からそのようなことを意識して指導していく必要がある。ところで、漢字学習は自立・自律学習がしやすい分野である。漢字は学習者自身が繰り返し書き、覚える必要があり、また、学習者が中級以上の学習をこなすには、専門書を読んだり、新聞を読んだりできる語彙力・漢字力が必要となってくる。現実問題としてコースが1年間である（実質8ヶ月ほど）から、こと細かい漢字指導で時間をとられるわけにはいかないという時間的な制約もある。

UE1の読解用テキストに付随した漢字教材には『漢字練習帳1』、『同2』、『漢字練習シート』があるが、教室では『漢字練習シート』のみ使用している。この教材には、各課で提出された漢字を練習するマスが漢字毎にいくつかあるが、授業では漢字の形の確認のため、一つ、二つ書かせるのみで、何度も書く練習は自宅学習にしている。授業では①提出漢字の形・読み等の注意点、②覚えるためのヒントとして該当漢字に関わる話をしている。そして小テストまでに覚えてくるということになる。結果は満点あるいは満点に近い点をとっている。

例： 筆記体と印刷体の違いや形の注意点。

例えば、「備<×>」、「満<竹冠+両ではない>」、中国人が書く竹冠「」。

提出漢字は「(下) 旬」だが、日常、見かける「旬の味」の紹介。「管」「官」「館」の音読みは同じ。

今回の発表は、時間の都合もあり、UE1における授業の前提となる考え方と漢字授業のさわりだけしか報告できなかったが、前提は文法（文型）・読解の授業にも当てはまらと思う。

授業報告「統計処理実習～アンケート調査の手順と方法～」

林 晃子

統計処理実習の授業の目的は、社会調査の基礎的な方法論について日本語で学ぶことと、アンケート調査を通して日本文化を学ぶことである。実際の授業の流れを4段階にわけて説明する。第1段階では、社会調査の概要、基礎統計量、データ入力方法を説明し、エクセルを用いてグラフ作成の実習を行う。そして、第2段階では、アンケート調査用紙の作成を行う。調査用紙の完成後は、第3段階として、アンケート調査用紙のプレテストをしてから実際の調査へうつる。調査用紙をすべて回収した後は、第4段階として、調査によって集めたデータをエクセルに入力し、グラフを作成してデータの分析・解釈を行い、レポートにまとめる。レポートを提出して、学生は半期のこの授業を終えることとなる。授業では、統計学や社会調査の学習よりも実際の調査に重点をおいている。調査に重点をおくことにより、日本文化についての理解を深めることができ、また学生が主体的に作業することができるのではないかと考えている。(詳細の授業報告と学生のレポート紹介は、同一冊子の授業報告「統計処理実習～アンケート調査の手順と方法～」を参照されたい)

研修会での発表後、フロアから受けた質問の中に、アンケート調査後にレポートのまとめ方やレポートの考察の書き方はどのように指導しているか、というものがあつた。一番心がけていることは、最初の段階でしっかりと時間をかけることである。アンケート調査では、最初のテーマ選びと問題設定に時間をかける。どうしても自分がこれをしたいというテーマを考えさせ、テーマに対して問題意識を持たせる。どのようなことを調べたいか、どのような結果が得られると思うか、といったさまざまな質問をこちらがしていくのである。そうすると、学生にとっても漠然としていたものが、何を調査するかがはっきりしてくるようになる。調査用紙の作成にとりかかる前に、学生に自分のやりたいことをはっきりさせておくことが指導のポイントではないかと思う。調査用紙作成段階で、なかなか思うような日本語が書けずに学生はつまずく。そういう時は、最初に立てたテーマ設定と問題意識を再三確認させる。何を調べるかが明確になっていれば、学生は諦めることはせず納得いくまで何度も書き直す。調査用紙完成まではこちらからの積極的な後押しが必要だが、その後はレポートを書き上げるまで一気に作業を進める。教師の立場からすると、限られた時間の中で最初の段階に時間をかけることは、予定通りに進むのか不安で焦ってしまう。しかし、結局はそれが一番の近道ではないかと思っている。

また、同じくフロアからの質問で、サンプリングはどのように行っているのか、同じ調査を日本の異なる場所で行うと違った結果がでるのではないか、というご指摘もいただいた。時間的な制約もあり、研究調査ではないため、厳密な調査は必要ないかと思う。ただ、大阪外大の学生を対象にして調査を行うため、時間が許せば、大阪外大生を母集団とした時の標本数の決め方や標本誤差・母集団推定の考え方まで授業でとりあげたいと考えている。

最後に、研修会後の懇親会でも多くの先生方よりたくさんの励ましやアドバイス、質問をしていただいた。感謝の意を表したい。